

映画「チリの闘い」は何を語るのか

島崎 隆 （東京唯物論研究会編『燈をともし』第26号、2018年）

南米のチリについては、ここのところ身近な存在になり、関心をもつようになった。

ところで、チリの映画「サンチャゴに雨が降る」は日本で1976年に公開された。歴史上初の議会選挙で1970年、社会主義政党の統一戦線（人民連合）が政権を獲得し、サルバドル・アジェンデが大統領に就任した。映画は彼の死までを描いており、いまでも自分の記憶にはっきり残っている。モネダ宮に籠城した大統領の死因は自殺ともされているが、自分の記憶に誤りがなければ、この映画では、大統領自身も自動小銃か何かを撃って、その戦闘のなかで死んだように描かれていた。軍隊の登場するシーンはブルガリアで撮影されたというが、全体として実写ではなかったと思う。だが、今回見た「チリの闘い」は当時の実写フィルムで創られたドキュメンタリーであり、まさに貴重な映像であった。

次に私がチリに出会ったのは、2016年、ピースボートの船旅で、チリの港町ヴァルパライソを訪問したときのことである。サンチャゴには行かなかった。旅行のコース名は「チリ軍政時代の歴史にふれる」というもので、まさにアジェンデ没後のチリの過酷な状況がうかがえた。当時のメリノ海軍大臣はピノチェトとともに軍政時代に30万人以上の市民を犠牲にした。その銅像を撤去せよという抗議運動を地元の平和運動家たちとともに、海軍博物館の前でやった*。そういえば、チリのユニークな選挙活動を扱った映画「NO」を見たときのことも思い出した。さらにまた、映画「ハリー・ポッター」で子役を演じた女優エマ・ワトソンが主演した映画「コロニア」のことも思い出した。ちょっと気味の悪い感じの映画だったが、それは、ピノチェト軍事独裁政権下でナチスの残党と結託して建設したという「コロニア・ディグニダ」という拷問施設への潜入の物語だった。物語はフィクションだが、こういう施設は実際存在したのだ。

* この点では、島崎「地球一周の船旅・105 日間体験記」、『葦牙』第43号、2017年、156 頁以下に詳しい。

映画「チリの闘い」（パトリシオ・グスマン監督）を見たのは、この船旅からの帰国後であった。この映画は第一部「ブルジョアジーの叛乱」、第二部「クーデター」、第三部「民衆の力」からなっており、全部で263 分、4 時間半という長大なものだ。すべて実写であり、いわば現実の革命運動とその崩壊状況がカメラに収められ、おおいに迫力があつた。1970年におこなわれた大統領選挙で、アジェンデは得票率の36% を取ったが、二位の

候補とは接戦であった。議会がアジェンデを選出したため、はじめて議会選挙で、アジェンデが率いる人民連合政権が誕生したのである(1973年9月まで)。国民の闘争をフィルムに収めようとするグスマン監督らのチームも危険を侵して活動している。あるカメラマンが革命後のクーデター未遂事件を撮影していたさい、機甲部隊が発砲した弾が彼に命中した。彼は撮影しながら倒れてしまい、絶命する。だが、カメラは回りつづけている。画面が傾く…。こうした貴重な映像が残っているということは、これらのフィルムを何とか国外にもち出せたということであり、以後グスマン監督はキューバなど国外で活動する。

大分以前に見たので、もう細かいところのリアリティは忘れてしまったが、膨大な数の民衆の集会やデモの様子が目の前にぼんやりと浮かんでくる。ところで、ぼくはここ数年、荻窪という地の利を得て、国会正門や首相官邸前で集会、デモにしばしば参加してきた。今日も多くの人たちが集まっているはずだと思うと、疲れているときも、つい出かけてしまうのだ。思わず日本の政治状況と比較したくなる。最近出かけたのは、「4.5 主権者が政治を変える! さくら祭り」(上野公園野外ステージ)というもので、ちょっと変わっている集会だった。一体、革命前夜といわれるような状況とは、どういうものなのだろうか…。東京では、1 万も集まれば多いといわれるが、当時のチリは膨大な数の労働者と民衆が街頭に出たのだ。ちょうど、最近の韓国の大統領罷免の運動がそうであったように。日本でも、現政権の危険性と無責任さが露呈しているが、国民がもっと政治に関心をもち、デモや集会に出てくる人びとの数が数十倍になれば、状況は変わらないのだろう。

以下ぼくは、100 頁以上の厚い冊子『チリの闘い』(アイ・ヴィー・シー発行、2016年)などを参考に、紹介と感想を述べたい。

第一部「ブルジョアジーの叛乱」は、最初に宮殿への空爆という劇的な画面から始まり、政権成立後の初の議会選挙を目前にした状況で人びとにインタビューをする場面となる。与党の左派人民連合にたいして、野党はキリスト教民主党(中道)、国民党(右派)が結束する。興味深いのは、撮影クルーが正体を偽って、自分たちはテレビ局「チャンネル13」だと名のり、ブルジョア家庭を訪問して取材する場面である。室内の贅沢な調度品が映し出される。また、大量の食料品を買い占めた市民たちが隣人に販売するというあくどいこともおこなわれ、政府の委員会がそれを売りに出させたりした。こうして、国営化を進めようとする大統領側と反動的な議会側との争いとなり、内戦の危機も高まり、学生暴動も発生する。興味深いのは、タクシー、バスなど、合衆国で研修を受けた運輸業者が反政

府のストをして、交通を麻痺させようとしたことだった。合衆国からの部品の輸入がなくなれば、交通は滞る。南北に長いチリの国では、輸送手段がきわめて重要なのだろう。チリは銅山で有名だが、右翼側がストをおこない、他方、左派の鉱山労働者たちが残業して、何とか間に合わせようとする。アジェンデの側が、スト支持の労働者に再考を呼びかける。だが、反政府側は、何とか混乱を起こそうと画策する。というのも、そこで犠牲者などが出れば、それで政府を糾弾できるからだ。

第二部「クーデター」では、1973年3月の選挙で反アジェンデ派が敗れたのちに、軍右派がクーデターを画策した。アジェンデ側のプラッツ將軍の暗殺未遂事件をきっかけに非常事態令が出されて、内乱状態になった。だがこのとき、ピノチェットらは動かず、内乱は鎮圧された。他方、左派労働者たちは、チリ中の工場、企業、鉱山、農業施設などを管理下に置き、「産業コルドン」と呼ばれる地域労働者連絡会を多数設立して活動した。問題であるのは、鉄砲取締法というのが成立しており、これを根拠に軍が市民の施設を捜索しはじめたことだった。だがこれは、実は労働者と市民を威圧し、萎縮させることを目的としていた。武器は実際どこからも出てこなかった。ということは、逆にいうと、市民側は自分たちを守る武器をもっていず、軍が反抗すれば、あっというまに軍政支配になってしまうということだった。左派も武装防衛準備の必要性を認識しはじめたが、全体の合意ができず、そのうち武器を隠しているのではないかという名目で、多くの産業コルドンが軍によって襲撃された。

さらに、経済を混乱に陥れようと、輸送業者が無期限ストにはいった。ニューヨーク・タイムズ紙が暴露したように、ストライキ参加者はCIAから総額500万ドルを受け取っていた。また当時、北米の諜報部で訓練を受けたテロリストたちがダイナマイトや焼夷弾を使った攻撃を250回にわたってくり返したという。合衆国のマスコミによれば、当時のCIA長官は、CIAがチリのストライキの準備を手助けしたり、資金援助をしたりしたことを否定しなかった。クーデター派は、人民勢力が軍の武力にたいしては意外と無力であることを理解しはじめた。このあたりの経過はわからないが、空軍機が攻撃のために飛びはじめ、モネダ宮が空爆されるという映像が、ここで再び流れる。こうして、大衆運動は徹底して弾圧され、数千の人びとが虐殺された。

ここで思ったことは、ロシアの偉大な革命家レーニンならば、このチリの革命運動をどう指導しただろうかということである。結局チリでは、左翼は軍隊の力には勝てなかったが、その点、あまりにも無防備だったようだ。もうひとつ感じたことは、革命側が最終的

に勝つことはあまりにも大変だということである。というのも、反革命勢力は、勝つためにあらゆる不正なこと、デマ、嘘、誹謗中傷、買収、売国、卑怯な駆け引き、経済封鎖、拷問、暴力、殺人、テロなどをおこなった。それらの手段は、直接に功を奏するのだ。だが、かりに革命側が同じ手段で対抗すれば、一時的には優勢を保てるかもしれないが、結局、革命の大義は失われる。公正な手段で民主主義的に、敵を追い詰めなければならない。だがそれが、どれだけ大変なことか…。

第三部「民衆の力」は、再び革命の動きを振り返り、反革命の動向に反対して、困難ななか民衆がいかに創意工夫し、団結しつつ、多くの産業コルドンを形成していったかを描く。「民衆の力を作り上げよう」のスローガンのもと、工場が直接、市民に生産物を売りはじめたり（直接供給制度）、閉鎖中の商店を労働者が開いたりすることが各地で起こった（人民商店）。以前は輸入に頼っていたスペア部品を自前で製造することもできるようになった。労働者自身が経営に参画して、社会主義への移行を促した。さらに、もうひとつの「人民勢力」として、学生、主婦、農民も地域部隊として組織化された。都市部の労働者が農民に協力して、雇用者側に立ち向かったりした。

以上がぼくのきわめて大雑把な紹介と感想である。もっと緻密に映画は構成されているはずだが、うまくは伝えられない。チリ革命はわずか三年で挫折した。だがそのなかで、多くの教訓と実現可能性が積み重ねられたことだろう。画面の途中で、ある若者が日本の大八車のような荷車に多くの木材や家具のようなもの（？）を積み込んで、さっそうと道路を駆け抜けるシーンがある。信じられないほど、おそろしいスピードと力強さだ。ぼくにはよくはわからない場面だったが、なぜか印象に残った。あたかも、「革命」が擬人化されて、サンチャゴの町を一気に通り抜けて行ったかのようだ。

ところで、ぼくがピースボートで南極の旅をしたときに、ウシュアシア号という南極観測船に乗り換えたが、その乗組員にはなぜかチリの人が多かったように覚えている。そして彼らの接客の仕方がとても人懐こく、ユーモアに溢れていたことを思い出す。南極への旅の厳しさが、彼らの暖かさで和らげられたような気がした。そしてヴァルパライソの旅のなかで、メリノ海軍大臣の銅像の撤去の抗議をして、軍政時の犠牲者の大きな追悼記念碑の前でセレモニーと一緒に参加できたことで、自分が「チリの闘い」にわずかにつながることができたように感じた。（2017年4月9日脱稿）